『百人一首』中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力（四）

奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の　声聞く時ぞ秋はかなしき

猿丸大夫

〈歌意〉

「人里離れた山奥で、散り敷いた紅葉を踏みわけながら雄鹿の鳴き声を聞くと、秋の悲しさがひとしお強く感じられるものだ。」

この歌は『古今和歌集』（秋・二一五番）に出ています。

（猿丸大夫）

生没年不明。実在を疑う向きもある。ナゾ多き人物で柿本人麿こそ猿丸大夫そのものとの説あり。

〈字母〉

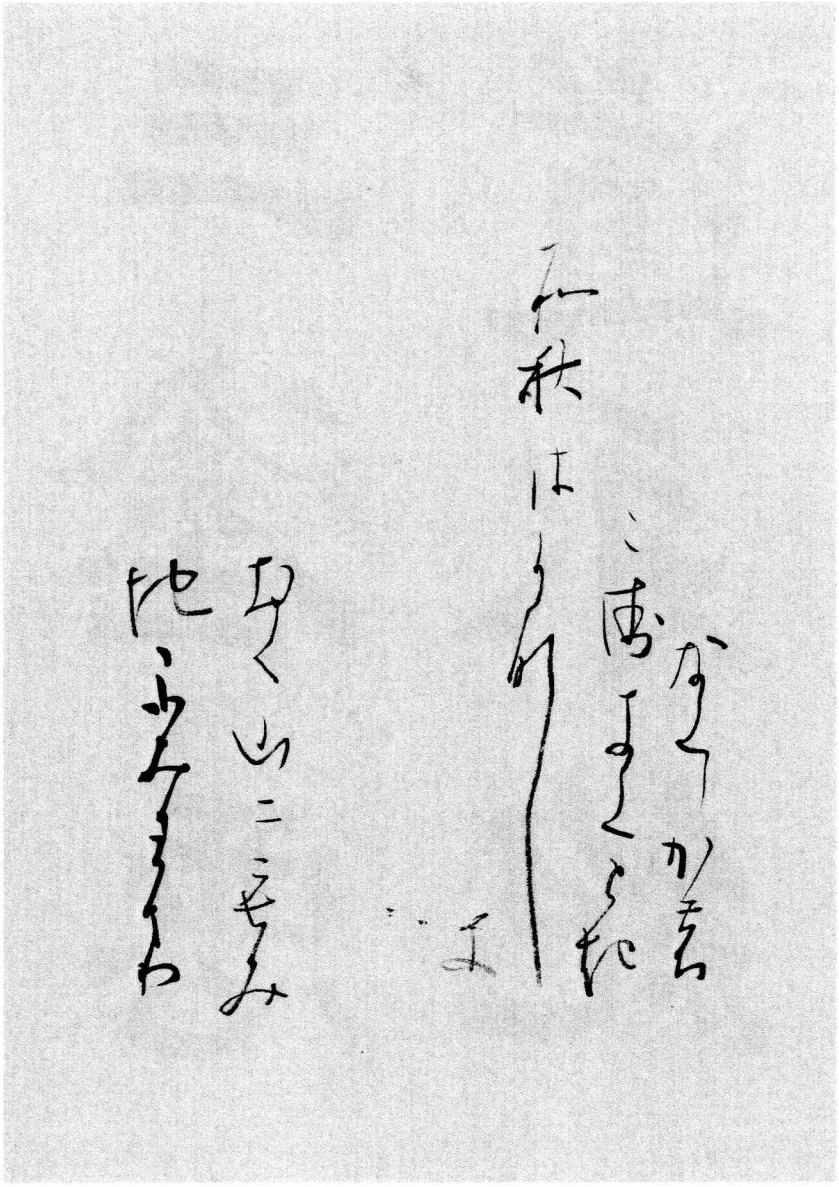
なくしか農
こ衛支くと起
所秋は可那し
支

←②

おく山二毛み
地ふみ王希

←①

この首も「逆勝手」と呼ばれる構成で、下を揃えた「木立式」で書かれています。四首目の「田子の浦にうち出でて見れば白砂の富士の高嶺に雪は降りつつ」は欠番の為、五首目に合わせました。（中村青藍）



中村素堂先生の書　大島香菊様提供